

強さ

karinomaki

強さ

人が傷つくのを恐れすぎて、言いたいことが言えないことがあります。私もずっとそうでした。しかし、その考え方はある事件がきっかけで、大きく改められました。私は強くなったのか、弱くなったのかわかりませんが、言いたいことがはっきり言えるようになりました。たぶん、それは強さだと思うのですが・・・。

言いたいことが言えないとき、私はそれを哲学で表現していました。カントという哲学者は、「超越論的論理学」という、純粹理性批判のくだりで、人の醜さ、仮像を排除することで、人の醜さと抽象的に戦っていると言えます。カントも優しい人で、人を攻撃できなかったのだと思います。しかし、言いたいことをはっきり相手に言えるようになった私の原因は、ある、心の醜い人との出会いでした。

カントの哲学

カントの哲学は、まず地をきれいにして、徹底的にゆがみ、よどみと戦うことでできています。しかし、カントは論理的にしか、人の醜さを暴いていません。カントはたいへん優しい人だったと思います。しかし、私はある、心の醜い人を見て、発狂寸前まで追い詰められました。

それ以来、私の優しい人格は壊れました。心のゆがんだ人には、毅然とした態度をとらないといけない、そうしないと自分が崩れてしまうと思ったのです。

カント

カントは、人のゆがみに蓋をして深く関わらず、自分自身を見つめて哲学をしたのではないのでしょうか。だから、アンチノミーという、理性の限界にぶちあたったのではないのでしょうか。

怖いようだけど・・・

これを書くことは怖いようですが、書きます。世の中は、醜い人でできています。差別、偏見が底に、膿のようにたまっています。

私はそれを見て狂っている場合ではなく、それと戦う意志ができました。

表面だけが美しい人の、心の膿を暴く覚悟ができたのです。

そのことで、相手が傷ついても仕方がないと思ってしまったのは、私が差別と偏見にあい、ズタズタにされたからなのです。

私は戦わなければならないと思いました。ある意味、心のゆがんだ人を踏み台にしないと、カントが提示した、理性の限界を越えられないのです。

何故なら、私は発狂寸前になり、何をしたか・・・頭から壁に激突して、壁を崩そうとしてしまったのです。

踏み台

これは差別発言かもしれませんが、世の中のよどんだ人を踏み台にして、天才の仕事は成立します。心の醜さを、カントやモーツァルトなどの天才は知っているから、それにあらがうために、創作をしたのです。創作で、底なし沼から伸びていこうとして。

カントの仕事

もし、カントが人と正面から向き合っていたら、哲学で戦うことはなく、文学で人のマイナスと向き合ったかもしれない。しかし、それは哲学よりもっと苦しいことです。

人の醜さがこの世のいちばんの闇だから……。しかし、それと戦わずに理性の限界を査定したカントは、美しい道徳の国を夢見ることができました。二番目の批判書、実践理性批判で。

しかし、私にはそれはできません。私はやはり、傷ついてそれが癒えない人間として、心の闇と、人の醜さという、心に深く刻まれた後遺症と戦っていかうと思います。

最初は、カントの仕事を深く尊敬し、カントの研究者になるつもりでしたが、私は私の傷と戦い、自分の道を行こうと思います。